

特別史跡の保存と公開

筆者が担当する春学期の授業「考古学概論」では、奈良市の平城宮跡を訪れて、現地研修を行うのが毎年の恒例になっている。現地を歩くルートは決まっていて、大和西大寺駅にほど近い平城宮跡資料館の入り口に集合し、資料館の展示をまず見学する。資料館の展示では、幕末から始まる平城宮跡の調査研究と保存の歴史がまず紹介され、続けて、奈良文化財研究所による多年の発掘調査の成果が、実物の出土資料や建物の復元模型などを通して紹介されている。



復元整備中の「大極殿院」

資料館の見学が終わると、「学術上の価値が特に高く、我が国文化の象徴たるもの」と1952年に認められ、特別史跡に指定された遺跡内を歩き、次の目的地、復元された第一次大極殿に向かう。平城

宮跡といえば、以前は、一面に草地在り広がるばかりだったが、次第に様子が変わり、1978年、文化庁が策定した「特別史跡平城宮跡保存整備基本構想」に基づいて、奈良文化財研究所・文化庁が「第一次大極殿正殿復原事業」を含む宮跡全体の整備を進めてきた経緯がある。1998年、「古都奈良の文化財」の構成資産として平城宮跡が世界遺産に登録されたのは、遺跡の重要性に加え、多年にわたる調査研究と保存の成果が評価されたことによる。宮跡を歩くと、ある場所では、建物の柱が立っていた場所が地表に表示され、別のある場所では、「遺構展示館」として、発掘された現場の状況が覆い屋根をかけて、そのまま展示されている。1998年には復元朱雀門が完成し、平城遷都1300年を記念して、2010年、第一次大極殿が復元整備された。このように、特別史跡の遺跡内では、調査研究の成果を生かしつつ、時代時代の手法で、遺跡の整備が実験的に行われ、試行錯誤が重ねられてきたことがわかる。

現在、特別史跡内で進められている「第一次大極殿院」の復元整備工事は、「大極殿」を含む南北約320m、東西約180mの区間で、「築地回廊」「南門」「東西楼」を復元整備する予定になっている。この空間は、天皇の即位や外国使節との謁見など国家の重要な儀式が行われた場所で、古代宮都における中心的な施設といつてよい。工事現場に隣接して国土交通省が設けた「復原事業情報館」は、CG映像や道具、資料サンプル等で、古代の技術を体験的に学習し、復元整備工事の意義を理解してもらうことを目的としている。2010年までの朱雀門、大極殿の復元整備は、「保存整備基本構想」による文化庁の事業だったのが、「第一次大極殿院」の復元整備は、国土交通省が主導する事業として進められているのだ。

国営公園に活用される遺跡

現地研修では、今年の3月、国営平城宮跡歴史公園の一部と

して開園した「朱雀門ひろば」を最後にめざす。2008年、平城宮跡を「国営公園」として整備することが決定され、続いて策定された公園基本計画をもとに国土交通省が奈良県と連携しながら事業を進め、今般、ついに一部開園の運びとなったのだ。

開園した「朱雀門ひろば」は、奈良と大阪を結ぶ幹線道路に面し、基本計画では、平城宮跡の玄関口、観光拠点ゾーンと位置づけられている。「ひろば」の東側に建設されたガイダンス施設、「平城宮いざない館」は、訪問者に奈良時代を今に感じてもらい、平城宮跡歴史公園の意義とすばらしさを伝え、往時の面影を残す公園や寺社へと誘うという。復元された朱雀大路を挟んだ西側の「天平うまし館」は、カフェレストランのほか、遣唐使の歴史解説コーナー、復原遣唐使船を設置する。隣接する「天平みつき館」は、奈良県内の観光情報を発信し、県内の特産品や平城京ゆかりの物品を販売する。駐車場の向こう側、復元朱雀門の手前の「天平つどい館」は修学旅行など団体客の集合スペースで、その隣の「天平みはらし館」では、展望デッキや展望室から平城宮跡の眺望が楽しめ、VRシアターやレンタサイクル貸出所、ジョギング・サイクルステーションがある。

ちなみに「国営公園」とは、閣議決定を経て、国土交通省が設置して維持管理する都市公園だが、複数の都道府県にまたがる広域的な公園・緑地の「イ号」、国家的な記念事業として、または我が国固有の優れた文化的資産の保存及び活用を図るために設置する「ロ号」の二種がある。平城宮跡歴史公園は、もちろん「ロ号」で、世界遺産「古都奈良の文化財」の構成資産の一つでもあり、我が国を代表する歴史・文化資産である平城宮跡の一層の保存・活用を図ることが、その設置の目的とされている。しかし、「ひろば」に新しく建設された諸施設を見ると、保存・活用のうち、経済活性化や観光振興を目的とした活用の側により多くの力点が置かれているように見受けられる。

同じ現象は、「ロ号」の国営公園として整備された他の遺跡の場合にも見受けられ、「邪馬台国が見えてきた」「弥生人の声が聞こえる」などがキャッチフレーズの吉野ヶ里歴史公園は、ガイダンス施設に加え、楼閣などの復元建物が次々と建設されて、あたかもテーマパークのようになり、九州有数の観光地となった。遺跡が全国的なニュースになった1989年以降の地域経済における「吉野ヶ里効果」は90億円を越えるとも言う。

近年、全国的な傾向として、遺跡を含む文化遺産と地域振興・観光が異なる方向から歩み寄っている。その一つは、この10年来、人口減少時代を迎え、政府が国を挙げて観光立国をめざす中、観光客を呼び込んで交流人口を増やすために地域の観光資源としての文化遺産に期待する地域振興や観光側からのベクトルだ。もう一つは、文化遺産を保護する意義を知ってもらうためには、より広い範囲の、より多くの見学者に訪れてもらうことが大切で、それが観光につながる、という文化遺産の側からのベクトルだ。平城宮跡はまさにその顕著な事例だが、平城宮跡資料館から特別史跡内へと伸びる文化遺産側からのベクトルと新しく整備された「朱雀門ひろば」から勢いよく観光側のベクトルが、「大極殿院」で歩み寄り、同時に、交錯し、せめぎ合っているかのようだ。